

2011.12.21

マレビトライブ番外編「N市民 緑下家の物語」テキスト

ハマノ町のカフェで泉野鏡子は語る

「緑下さん」

「はい」

「緑下くんの、弟さんですか」

「ええ。稲光です」

「泉野です。泉野鏡子です」

「あ、はい。わかっています」

「寒いですね」

「ええ」

「お兄さんから連絡ありました？」

「いえ」

「あれからずっとですか」

「はい」

「そうですか」

「なんです。話って」

「ああ。でも、言っても、信じてもらえないから」

「え、じゃ、なんで呼び出したりするんですか」

「ま、だから、言っても信じてもらえないことを、あえて、言ってみようかなと思って」

「それは、なんですか、じゃ、言ってください」

「緑下くんは、もう死んでいると思います」

「なんでそんなことがわかるんですか」

「私、見たんです。緑下くんの幽霊を」

「え、幽霊」

「ええ。」

「兄の、ですか」

「ええ。」

「幽霊ですか」

「幽霊です」

「へえ」

「ナカシマ川あるでしょう。そこに橋がかかっています。その上に、毎週金曜日、午後4時5分ごろに現れるんです。」

「毎週金曜日なんですか」

「ええ」

「決まってるんですか」

「決まってるみたいです」

「なんでなんでしょうか」

「なにがですか」

「なんで、金曜日に」

「知りません。相手は幽霊なんですから」

「ああ、そうか」

「私は、もう3回、緑下くんの幽霊を見ました。その3回が金曜日の4時5分であることに気付いたんです」

「幽霊なんですか？」

「え？」

「ほんとうに幽霊なんですか」

「ええ」

「それは、本人じゃないんですか」

「本人って、緑下くん自身って意味ですか」

「ええ」

「いやいや、本人じゃないから、幽霊なんです」

「でも、どうして幽霊だとわかるんですか」
「なんとなく、この世のものとは思えなくて」
「兄に似てる人ってことじゃないでしょうか」
「違います」

「あれは緑下くんです。緑下くんだけど、もうこの世の人ではない、緑下くんなんです」

放射能防護服を着た男が、ゴミを拾っている

「N市には、まだまだ放射能がたくさん残ってるって信じている人が最近増えているみたいですね」

「だって、その当時、70年間は草木も生えないって言われていたんですから」

「見に行きます？」
「え」
「今日は金曜日です」

「私、知ってるんです。よく見える場所を。きっと、そこからでないと見えないんです。行きますか」

「ええ。じゃ、行ってみます」

金曜日の4時5分、稲光と泉野は橋の上の陽の幽霊を見る

「陽兄さん！」

「ね、よく見えたでしょう？」
「あれは兄さんなのかな」
「あ、だから、幽霊の兄さんね」
「幽霊って。そんな、いるわけないですよ。非科学的じゃないか」

「だって、弟のあなたが、それだけ大声で叫んでも答えなかったわ」

「いつもの兄さんらしいです。気分屋だから」

「じゃ、私はこれで。来週の金曜日にまた、緑下くんに会いに来ます」

「あわれなものだ。幽霊っていうのは、普通なら、まずはそいつが死んでそいつが幽霊になって出て来るものだろう。幽霊になってはじめて、ああ、兄さんは死んだのか、と気付かされるなんて、なんて最後まで不甲斐ない男なんだ。あとさき逆だろう」